

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和三十一年一月十五日発行(毎月一回・十五日発行)

(通第八十二号)

目

たのまるるただ念仏……………花田正夫…(1)

三つの往生……………福島政雄…(4)

読書餘瀝……………三瓶徳英…(8)

次

「五作さん」に就て憶ふ……………松村繁雄…(11)

慈

光

第八卷

第一號

たのまるる、ただ念佛

花 田 正 夫

もう二十四、五年も前の正月二日でありました。信友数人と共に、蓮華谷の池山先生の御宅を訪ひ、年賀を述べました。応接室には、京阪神はもとよりのこと、遠く岡山広島島の信者の方々も来られて居り、赫々と暖炉の燃える中に、先生を中心にして、車座となり、歳末から年始にかけての所感、法味に皆のものは聞き耳を立てて居りました時たのまるる ただ念仏の われにあり

「さるべき業は さもあらばあれ
の一首を、手ばやく半紙に書かれて「これが、本年六十歳になつた私の年頭の所感であります」と申されました。大体を解説いたしませう。

『さるべき業』とは、歎異抄の第十三章に『さるべき業の催せば、いかなる振舞もすべし云々』とある、あれです。しかるべき業で、身から出た錆、通れやうのない業報であります。

『さもあらばあれ』とは、お慈悲に随順して、罪悪を罪悪とし、業報を業報として受け止めて、それに随順するの

でありますから、罪悪も、業報も結局お念仏の中にとけて行くといふ境地であります。

『ただ念仏』とは、先生の講話には何時でも、必ずと云つてよい程出て来る、歎異抄の『親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまらざるべし』のそれでありませう。そしてまた歎異抄末文の『よろづのことそらごとたわごとまことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておほします』のそれでもあります。

『われにあり』とは『親鸞一人がためなりけり』であり、『かくの如きのわれらがためなりけり』と聖人が御信管下さるところであります。

『たのまるる』はたのみ力になる、たのもし、といふ意味であり、またその根本は、如来の方から常時不断の喚び声、御廻向によるのであります。縦令一生道悪の私共に如来の方から『称我名字と願じ』て下さるのであります。

これ以上の解説は無用でありませう。唯この歌が出来た時の御心中を、次の様に告白せられましたのを加へます。

『この歌は、本年六十に達した元旦の朝です。若水をつかつて、先づ仏前に坐り、二こと、三こと、お念仏申しました。その念仏申してゐる私の心の中を述べたのです。耳順といふ六十にもなつた。人生五十といふのに、もう私は十年も生き延びて来たが、さてこの年にもなれば、耳にさからふものなく、やすらかに、らくな生活が出来るかと思ふと、全くその反対であります。歳末年始にかけて、すでに種々の苦が、二つ、三つ、四つとチャーンと据えてゐて、然もなまやさしいものはひとつもない、可成のものばかりであります。私の岡山時代の歌に、衆生かはいや生死の海に、おのが罪から浮き沈み、といふのがありますが、全くその業苦は、おのが罪からであり、身から出た錆で、何処へ訴へやうもないものであります。さうした私に、衆生かはいや、といふ西岸の喚びかけ、ただ念仏しての大悲がある。そのただ念仏のたのもしさに、さるべき業を受け止めて、行路難の人生を切りひらく覚悟の出来た端的を詠んだものです。』

以上は正月二日にお聞き申した大体のお話であります。が、その年の或日でありました。確か西本願寺前の顕道会館の講話の時と思ひますが、矢張りこの歌を引用されて、歎異抄の七章「念仏者は無碍の一道なり」の信味を語られました。その時

『独逸のゲエテはファストを著し、ニイチエはツアラストラを書いてゐますが、ファストは理想的全人をあらはしツアラストラは強い意志の超人を説いてゐる。そして両者が苦難に処するには、一つは『待つてゐる』と云ひ、一つは『のぞむところ』と打ち向ふ、とある。

成る程、人間が苦難に陥るとき、それだけで大変なのに、次にはどんな苦しい問題が来るであらうかと、所謂とりこし苦勞をしたり、現在の苦勞は何時までも去るまい、困つたことだ、といふ風に、消局的な暗い心では二重三重の苦しみがまつはるが、苦難こそ我がのぞむところ、待ち待つてゐるものだといふのであれば、それから来る苦痛も軽いに相違ありません。ことに非常に大きな方の持ち主であればなほのことでありませう。

然し、これと『さるべき業はさもあらばあれ』といふ心境をくらべて見ると、前者はまだ手応へがあるが、後者は岩を手で打つやうなもので、打つ手の方が痛くなつて、手応へも一向しないといふ趣があらませう。そこに、無碍の一道の信味こそ、本当の意味において強いと申せると思ひます。

と加へられたことがあります。その日の講話後に、二三の聞法者に、この一首の歌を次から次へと書かれて、如何にも嬉しくてたまらぬ、これ一つを、どうか身につけておくれよ、と云はれむばかりの御様子でありました。

我聞如是

光陰は実に矢の如し、星霜すでに二十五年。当時青書生だつた私のはや五十二歳となりました。

この歌を聞き初めた頃には、如何にも勇ましい、痛快な感じを持つてゐて、信仰の前には如何なる難問題もまたけることは出来ない、信心一つで万事を処理させて貰へるといふ風に、非常な意気込を覚えて居りました。

それが内に煩悩熾盛にして具足の身、人生の行路に行きなづみ、業火の中に焼かれるといふ問題に出遭ふにつけ、人生到るところに有碍の壁にぶつかかるのであります。そして「ヘナク」と崩折れるのであります。その障り多き中にあつて、いよ／＼「さればそくばくの業を持ちける身にありけるを、たすけんと思し召し立ちける本願」の悲心の忝けなき身にします。

ことに私自身の五年前の発病と不治の現在、更に身にもつ業報のきびしさ強さを、何処に遁れるすべもなく、身一つに受けて、その重さに、身も世もなく打ち沈む下から、それにさへられぬ大悲のたのもしさを『ただ念仏』に頂いて、一步一步人生を辿らせて頂くにつけては、今更に、先生この遺詠をなほ／＼感佩するのであります。

そして『無碍とは、碍りが無くなつて了ふのではない。碍りはひつきりなしにあるのだ。そのためみなく続く罪障

三つの往生

三つの往生について、無上菩提心を起すといふこと共通でありますところから、その心持を申述べるために、上述ジャンバルジャンを引合ひに出しましたが、これから三つの往生のちがひ目について少し申述べて見たいとおもひます。

上輩の往は、無量寿仏が諸々の聖衆と、その人の前に現れ給ふ。それから中輩の往生は無量寿仏がその身を化現して、化身となつてあらはれ、それから下輩の往生は、臨終に夢の如くに彼の仏を見奉り、そして往生を得る。

この三つの違ひ目といふものがどういふものであらうかといふことを前から私は考へさせられてゐるのであります。まあ一応考へて見ますと、上輩といふのは、鬼に捨棄棄欲して沙門となる、でありますから、よつほど立派な修行をして居るといふ自分の心持があるのであります。そうするとそれは往生の種には到底ならないから、若しそんなことで得意になつてゐるならば、そこまで行く

にあきれたまはず、碍へられぬひかりを恵むで下さる、そこに障りがさはりとならなくなるのだ』と教へて下さつた日の先生の温存をも想ひ浮べるのであります。

罪障功德の体となる 氷と水の如くにて

氷多きに水多し 障り多きに徳多し

この御和讃は、嘗て阿闍世王が、我身の罪業の重さに崩折れて、全身に膿血を流して悲歎し号泣した日、その身に月愛三昧の仏の慈光を被つて、罪障の苦熱から輕快に向けられ、或は、十悪・五逆のあらゆる悪を身にそなへた下品、機類の臨終に、地獄の業火の現前する時、念仏のいはれを善知識に聞いて、その業火業風がそのまま清涼の風と転じる姿を想ひ知らしめて下され、それがそのまま我が身の事であり、その身に被る無碍光の功德と頂くことであります。

年頭『たのまるるただ念仏のたのもしさ』の一端をのべて御膝下に御送り申します。

福島政雄

て迎へてやらないと、自分自身に行つて迎へてやらないと解決しないと、かう云ふ事ぢやありませんまいか。

中輩となると、捨棄棄欲して沙門になるといふこともなく、また大いに功德を修するといふこともない、この世の善い事は多少やつた積りである。それを廻向して生れたいと思つてゐるが、矢つ張りそういふ自分が善を多少やつた積りといふ、それにひつかかる心があるから、化身をその前につかはして、淨土に往生せしめなければならぬといふこと、かう云うことであらうと思はれます。

それから下輩になりますといふと、何も修行らしいことは出来ない、そこに念仏を聞いて歡喜信樂と、その歡喜信樂も底を洗へば仏の廻向であるといふことになりすけれども、歡喜信樂といふやうな有様になつてゐる。そして仏名を称へる、その国に生れようと願ふのであります。そこはそれは仏の賜物でありますけれども、まだこの時、この

行者は自分の至誠心とおもつてゐるのでありませう、けれども自分の心持が大分すすんでゐる、チットモ大したこと出来てゐないといふ心がそこにある。さうすると阿弥佉仏としてはその前に御自身で出掛けて行かれなくとも、これは大丈夫、だから夢の如くに、彼の仏を見奉るといふ、それは仏の御心がその人に通つてゐるのでこの人は往生する、来迎とか化身とかいふことは無用であるといふこと、やうに感じますのであります。

それからこの夢の如くかう読んでありますが、これは御承知の様に聖徳太子が、夢の字をホノカニと読んでおいでになります。私は或る時これは金子先生からうかがつたやうに思ひますが、ほのかに仏を見奉るといふのと、正面から姿をあらはにしておいでになるといふのと、行者の方から云へばどちらが力強く感ぜられるか、聞かされるかと、斯ういふことを考へて見ると、ほのかに仏を見奉る……といふ方に非常にひかされる。

私共は経験とか体験といふことがありまして、ハッキリと見るといふやうなことは一面では非常によいこととあります、然し……ハッキリと見たとかわかつてゐるとかいはことは自分のひとりぎめになるのでありましてそれがどれほど確實であるかはよほど疑問であるとおもふのであります。三輩往生といふ三つの段階にはちがひ目がある。これはどんなことであるか。その違ひ目があるといふやうなこ

であるとハッキリ言はれて見ると、自分は本当はどれでもない、何処にも行きたい心になるが、といふことになるのであります。

それからそれよりも大事なことは、さう云ふ風に上中下の三輩に分けて、種々の功德を並べられて見ますといふと、種々の功德についてこの世の中で、自分がそれをてがかりに生きて行くといふことは、結局何処にもないといふやうなことになるのでありまして、下輩にありさうだと云ふやうなことになる、それも実は駄目となりますといふと、所謂淨土の往生は、仏の力によつて自分がひらかれたつ行くといふのが唯一のことであるとして一向専念無量寿仏といふやうなことは、向ふから一向専念にならざるを得ないやうに仕向けて下さるところの、向ふの仏の御力であるといふところまでになつてくる。だから無上菩提心を起すといふことと、一向専念に無量寿仏を念ずるといふことが、どう申しますか、然もそれが転ぜられた意味において私の世界といふものになつて来る。そこをハッキリと知らせられるのが、この三輩往生の御文であるといふ風に受け取られて参りますのであります。

さうすると、夢の如くに仏を見たてまつりといつてありますあれもであります。矢張り私などの結局のところであります。はつきりと仏様を見るときは、いふやうなことではない。何かしら仏様がほのかに感ぜられる。ほのかには言

とが、私の問題になつてゐるのでありまして、今申したこととで解決になつてゐるとは思へませんが、然し斯う考へられますがどうでありませうかといふことを申しあげるのであります。一応の考を申上げるだけで、私も更に深く考へねばなりません。

それから一休土・中・下・三輩に分けるといふことはどうでありませうか。

仏の御慈悲は平等に一切衆生に及ぶのである。そうすると、その一切の衆生がどう云ふ有様であつたにしても、夫々の有様に應じて仏佉の救済の御慈悲の手は延びるのである、さうなりますと、上・中・下に分けなくともよいぢやないかといふやうな理屈もそこに言はれるのであります。

これは何時も申します通り、上・中・下に分けて、上輩は斯う云ふもの、中輩は斯う云ふもの、下輩は斯う云ふもの、だといふことを、けじめを立てて言はれるといふと、私ながら私が、どの辺になるかハッキリ見せしめられる。若し上中下のこの三輩の上で言へば、下輩でありますけれども、然し下輩のもう一つ裏返つて来たものである。この前の願成就文のところでも申しましたところの様なのが私の立場でありますけれども、その私の立場をハッキリと知らせられるのは、例へば、斯の上・中・下の三輩といふものが、チャンとあるんだと云ふことを云はれて見て、始めて斯様々々

ふもの、それは心の底にしみじみとした感じである。否定は出来ない。併し仏様のいのちの廻向でありますから、何か心の底に強いものが感ぜられるのであります。心の底で感ぜられるのでありますから、目に見るといふことではないけれども、そこは比喩的に夢の如くに彼の仏を見奉ると言はれてゐるのであります。ほのかに深く感ずるといふことは、私としても身に経験がないぢやありませんと云へるのであります。それだから、夢の如く阿弥佉仏を見奉ると云ふのが私にはどうやら解る、正面から阿弥佉仏を見奉ると云ふことと、拜むといふことは私には解らぬとなつてゐるのであります。もつとも臨終の場合のことでありまして、本當は私などが申すべきことではありません。

それから繰り返して申しますと、大菩提心といふこととありますが、さきから繰り返します如く、この世の一切のことに手を放した境地になつて、初めて大菩提心と云ふものが、然もそれは淨土の大菩提心として私にひらかれて来ると云ふやうなことになりますのであります。

そこがその自分が勇気を振り起して、この世のあれも離す、これも離すといふのであれば、これは上輩であります。さうでなくて、自分は手を放したてたらぬと云ふことではないけれども、どうしても手を放さずにやならぬ、或は向ふから離れて行くことになりましてあります。この一番はつきりした場合はたとへば自分のこの娘は大事な

娘だと思つてゐても死んで行くといふことになり、この世からその娘に手を放す、放させられる、自然と放れて行くといふことになるのである。すべての方面にその通りなのでありまして、私などのやうに、我欲の強い、名譽欲などの相当強く、それから傲慢心も強いのでありますからして、そんなのが、これにはもう手を放すと、さう云ふ工合には伸々うまく行くものぢやないものであります。けれどもこの世の種々な逆縁に遭うて、どうしても放したくない手を放さざるやならぬやうになるといふところに、浄土の大菩提心といふものがひらけて来る。それだから何と云ひますか、斯くすれば、斯くなるものと知りながら、やむにやまれぬと云ふやうなことであります。仕方なしに、もうどうしても手を放さざるやならぬやうに、すべての環境その他がなつて来る、ぢやからやむを得ず手を離す。然しやむを得ず手を放すけれども、やむにやまれぬものがある、それが仏の御慈悲、念仏の上においてやむにやまれぬものがあつて、自然と手を放されて来る。そんなところを、私は近角先生からよく、信仰の境地といふものは、人生手放しの境地であるといふ御教化をよくうけたのであります。手放しといふのが、自分が勇ましく手を放したと云ふのでなくて、どうしても手を放したくないけれども、手を放さざるやならぬとなつたといふやうな心持を仰言つて下さつたことでもあります。

讀 書 余 瀝

近角常観先生御著述のものは殆んど持つて居りましたが、東京震災のため全部焼失して、誠に惜しく淋しく耐えられぬ気がしましたので、其後知友に頼み少しづつ集めて居ります中、信界建現がとび／＼乍ら二十四枚になりましたので、繰り返し／＼拝読させて頂きます。ところが私は四月下旬から左眼が紙を貼つた様に見えなくなり、七月末まで眼科医院に通ひましたが、効果なく、諦めて医院通いを止め、今では殆んど何も見えなくなりました。炊事も、読書も、右の老眼のみで早く疲れます故、一節づつ読んでその大意を記して、御教化を蒙りて居ります。昭和七、八年頃の信界建現誌に、思想問題の論説を数回御示し下さつてありますが、二十余年後の今日に、全く適合する御教誡であります。只今手元にあります中から、其二、三を拾つて簡単に大意を綴つて見ました。

一、思想問題の研究

人生の動乱について、今や世界の動乱は正に酣である。

それからどんなに、表面に瘦我慢を張つて強がつて見ても、上輩のやうなことで、中輩のやうなところには落ちつけず、下輩のところは身に適ふと考へて見ますものの、生活の實際問題にブツブツカッテ来ますと、此の上輩も中輩も下輩も自分の境地ではない、自分は結局此の三輩往生といふことをきかされることによつて、自分が何も本當のことは出来ない下劣な者であるといふことがはつきりなつて来るといふことになり、

仮りに此の三つの階段を私の心の前に示される。そして私がどこに落ちつくか考へて見よと言はれるところであり、私がつまづかすといふ／＼私が本當のこの出来ない身であることがわかつてくる。三輩往生の姿は私のいのちを照す鏡であります。私のいのちのみじめな姿がわかつて来る。それと同時に私の此のいじめな姿を照らしとほしてしみじみと私をあはれみたまふ仏陀の大悲が私のいのちに徹して来る。出来ないものをどうしても出来してやりたいといふ仏の大悲であります。そこにお念仏が私のいのちに浮んで来る。念仏称名たゞ一つといふ境地がこゝからも私の上に開けて来るのであります。

三つの往生についてまことに粗略な述べ方を致して相すみませんがまづこれだけにして戴いて、私としては更によく考へも致し、身にふりかへつても見たいと思ふ次第であります。

三 瓶 徳 英

我国もその渦中にある。これは近代文明の結果が此に到らねばならぬ運命を持つて居た。総べて動乱の根本は思想の動きである。その解決を如何にすべきか！

かゝる大問題を、政治家、宗教家、学者等にゆだねておいても、論議や経営などで解決することはむづかしい。世界の動乱は個人々々の思想界の投影で、各個人の心は世界の縮写図である。故に我々各自に動乱に対して全責任があり。私自身の問題である。

そも／＼個人にしても世界にしても、五分々々の争ひのために、食ふか食はれるかの渦中に憂ひ苦しむので、政治界の同党異閥、各人の是非善悪の思想で、自分を是とし、他人を非とするがこの心の止まぬ間は動乱は止まない。

ここにおいて、是非善悪の争を止めよといふ律法主義を生ずる。即ち何々すべし、何々すべからずと命令する。政治、教育、宗教の大部分は皆嚴格なる律法主義である。命令、教訓等を実行するとしても、結局是非善悪は止まぬ。遂には放縱主義を生じ、自分勝手の手考に陥り、人間の本

能とか、自然主義とかの名の下に、各自の自由を主張するやうになる。

今日の青年の多くは未徹底の思想で行詰る。徒らに理想を高くして実行難に煩悶し、空疎な理論を追うて空中樓閣を画き、或は自分ぎめの信念にて進まんとしても、實際界に於てつきあたり動けぬ様になる、是等は皆真実のものではないからである。

真面目に考ふれば我等には徹底せる真実はない。選択集に云はれる、破戒、無戒、愚痴、無智、少聞、少見、貧窮困乏にして、発菩提心も孝養父母も奉仕師長も、真実に不可能で、ただ五逆十惡なる罪惡の塊である。

選択の本願は、かかる我等をみそなはして、その二々に對して、同情の涙を濺ぎ給ふ親心である。この慈悲の塊が如來で、如來自身は念仏に於てあらはれて下さる。念仏成仏、是は真宗である。

我等は律法主義の下に癡惡修善を為し得ず、放縱主義の下に煩惱罪惡を脱する能はざる不真実の迷妄を憐み、何処に煩悩罪惡を脱して、私が活ける為に人を食はんとすれは、身を捨て身体を施し手へて下さつて、心を満たして下さる大慈大悲が、五劫思惟、兆戴永劫の御苦勞である。この絶対の大悲廻向によりて、強情我慢な私も頭が下がりあやまりはてる。これ我等の不実が如來の真実に滅ぼされたのである。不実の者が、不実を続ける事が出来なくなり

の方面を見ても頗る不徹底、姑息の気分がみなぎり、如何にも五濁惡世の有様で、これはひとり我国のみならず、世界が動亂の渦中にある。

斯る世の中にも、心強く感ずる事は、親鸞聖人の教で、この教は、恰も不倒翁の如く、如何なる動揺に遇うて倒れても重力の中心に立返り、力強く起き上る如くである。

現今の如き濁惡動亂の世に於て、単に清浄にすべし、真実なれと教へたとて、實際には中々行はれ難いのである。今濁惡邪見の我等を、あくまで憐み、恵み、救ひ給ふが大慈大悲の如來である。真心徹到の一念に、流転迷妄の禍根を断ち給ふが『念仏成仏は真宗』である。本願他力真宗である。

なほくはしく言へば、濁惡不実の者を斥けず、何処々々までも、大慈大悲の心を持ちて見捨て給はざるが故に、如何なる不実の者も頭がさがるまで変らざる、徹底的の真実無限の真実、絶対の真実で救済したまふ。これが如來の真実で、念仏成仏である。動亂闇界の光明であり、波瀾多き人世救済の船である。正像末和讃にこれを

無明長夜の灯炬なり 智眼くらしと悲しむな
生死大海の船筏なり 罪障重しと歎かざれ
と調仰讃歎せられてゐる。

三、信仰問題と思想問題

真実の道にひき入れて下さる事が、永劫の御修行である。貪欲に對しては無貪を以て、瞋恚に對しては無瞋を以て、愚痴に對しては無痴を以て、言虚偽に對しては、和顏愛語、清淨真実を廻施し給ひ、人生是非善惡の迷ひの根が絶たれ、如來の真実に融化される。

茲に於て人生の動亂も、思想界の乱脈も、最後の光明界に達して、人生の安慰、世界の平和も実現する。かくて我等は五濁惡世に生活しながら、人生の帰趣を見出し、念仏裡に救済せられる。和讃に

無碍光の利益より 威徳広大の信をえて
必ず煩惱の水とけ 即ち菩提の水となる
罪障功德の体となる 氷と水の如くにて
氷多きに水多し さわり多きに徳多し
名号不思議の海水は、逆誘の屍骸も止らず
衆惡の萬川歸しぬれば 功德のうしほに一味なり
尽十方の無碍光の 大悲大願の海水に
煩惱の衆流歸しぬれば 智慧のうしほに一味なり
とは、高僧和讃の曇鸞章の力強い御和讃である。

二、濁世動亂と親鸞聖人

親鸞聖人の浄土真宗は、時機相應の要法で、如何なる時代にも輝く教である。

今我國の現状は、政治、宗教、教育、実業等、各界何れ

信仰問題は人生問題を解決し、活きた力を現はす。

思想問題は人生問題の方向を規定する。故に信仰の徹底は思想の根底を確立する。

現代の動亂せる人生問題は紛々として左右両傾の思想、社会科学の理論等に没頭し、人道の義理も、上下の秩序も踏みぢられんとする危機をはらんである。

茲に相對界の思想を轉化して絶対信仰に入らしむべく、永遠の平和と幸福を顕現する宗教問題、特に絶対信仰を強調すべき事が現代の第一義である。

親鸞聖人の絶対救済ならびに絶対の罪惡觀に對する御自督は直ちに我等の上に持ち来りて自覚せしめらるる、この自覚なき人々は、上下、高低、左右、前後を争ひ、相對善惡を是非し、論議斗争のみ始終する。

さて絶対信仰の測源についてかへりみるに、善導大師は一切善惡の凡夫 弘願一乘に救済せらるるを説き、法然上人は善惡の凡夫を憐愍して、選択本願海に皈入せしめ、親鸞聖人は、自分一人がためなりと頂かれた。

相對善惡と絶対信仰との關係を考へて見れば、相對善惡は各人自己を中心として善惡是非を争ふもので、畢竟五分五分の水かけ論である。即ち聖徳太子の憲法第十の『是非のことわり、なんぞ能く定むべけんや。相共に賢く愚かなること耳輪の端なきが如し』に相當する。

さてこの相對善惡のみの世界ならば、人生は全く光のな

い輝沌たる混乱のみとなるが、この相對善惡の闇黒世界に
絶對無限の大慈大悲の絶對善が現はる時、相對の善惡は
何れも絶對罪惡たる事を自覺し廻心、懺悔して、絶對善の
光明に攝取せられ、救済せられて、絶對の善惡觀を生ず
る。これを教行信証の後序に、華嚴經の偈を引き『もし
菩薩種々の行を修するを見、善不善の心を起すことありと
も、菩薩は皆これを攝取す』と説かれてゐる。
絶對の救済に真心徹到し、絶對の善惡觀より相對の善惡
を顧みれば、歎異抄の『然れば本願を信ぜんには他の善も

『五作さん』に就て憶ふ

松村 繁雄

鹿苑宇田先生の『人の世にさ・やく』の中に次のやうな
お話がありました。
江州に五作さんといふ人がありました。先年亡くなられ
たのでありますが、浄土真宗の念仏者として非常に人々に
慕はれた方でありました。この人には息子がなかつたので
婿養子を買ひました。その養子といふのが是は又反對に大
変な仏法嫌いで、仏様といふと気分が悪くなるといふ風で
ありました。

てブイと出て行つて了ひました。

然し、五作さんはそれに対して決して小言を云はない
で、黙つてあとを取りかたづけ、それから案内してあるお
寺や親戚などを廻つて

『まことに急な事を申しますが都合で明日の法事は延し
ますから、どうか悪しからず……』
とわびて歩きました。

万事かうした調子でありましたが、五作さんはただの一
度も不足がましい事をいうた事がなく、唯一人でつつしみ
深くお念仏をしてゐるだけでありました。かうした状態は
五作さんが死ぬるまで続いたのでありました。

我々の常識から考へますと、いかにも堪へられない事だ
あります。自分の跡継ぎとして家庭に入れた養子が、斯う
云ふ有様であつては、それを黙つて堪へるといふことは、
まことに大変な事でありました。

さて、この五作さんが死ぬる時であります。枕元に養子
を呼んで苦しい息の中から、この世の最後の言葉として

『お前さん、ほんまに永い間お世話になりました。わし
のやうなものを親爺じやと云うて怒りもせず、よう世話
をしておくれた。わしのやうなものをなあー』

こう云うてお念仏しながら死にました。五作さんは、そ
の養子に対してつひに一度も『仏様を拜め』とも『お念仏
を称へよ』とも申さずに、ただ『わしのやうなものを――

要にあらす、念仏にまさるべき善なき故に、惡をもおそる
べからず、弥陀の本願を妨ぐる程の惡なきが故に』がうな
づかれる。

相對界に於ける善惡は、善人は善を誇りて後には惡に陥
り乍ら、自らは惡人とは自覺せずして、善人と思つてゐる
故、最後には暴力汰汰にまでも訴へる様になる。

親鸞聖人の三願輸入は、自力雜毒の善の心をひるがへし
て、絶對を眞実に廻入轉向すべき人生の指針である。

或時のこと、明日は先祖の御法事を勤めるといふので、
五作さんが仏壇の掃除をし、お磨きをし、お供物などをし
て居りますと、そこへ養子が一杯呑んで歸つて

『何をガタ／＼してゐるんだ。俺は仏法など大嫌いだ。
坊主の顔を見るだけでも胸が悪い。大体、親爺さんがいつ
も口の中でブツクサク、ナンマンタブ／＼といふのを聞
くと身震いがするんだ。法事など止めてしまへ』
といつて、お供物を土間に投げつけ、土足で踏みじつ

怒りもせず、よう世話をしておくれた。わしのやうなも
のをなあ――』といふたといふことでありました。

五作さんにとつては、仏様を拜め、念仏せよ、とは云へ
なかつた。それはつねに如來のまことに照らされて『惡
人』を自分の内に見て居た。不法なわたし、懈怠なわたし
をふりかへる時、他人に対して説教は出来なかつたのであ
りませう。ところが、五作さんの死後、養子さんの心がス
ツカリ交りまして、今は尊い念仏者となり

『親爺さんは、私には尊い善知識さまでありました』
と繰り返しながら百姓を励んで居られるさうです。

さて私はこの実話をきき種々のことを考へさせられるの
であります。

第一に『惡人救済』の浄土真宗の教をやもすると『惡
くてもよいのだ』と誤解して、折角救ひの門に入りながら
却つて邪道に沈んで行く私共の悲しい間違ひに対して、そ
の蒙を啓いて下さるところのまことに尊い教でありまし
て、鹿苑先生は是に対し

『五作さんが、わしの様なものをと、全自己をあけて否
定し去つたところに、法界のまことが、念仏の眞実が、群
生界にあらはれ給ふ風光が、鮮やかに仰がれてまゐりま
す。この、わたしのやうなものを、といふ一言こそ、私た

ちが心を砕いて味はねばならぬ言葉であります。』
と附言して居られます。

この五作さんの実例は特殊な家庭内の問題のやうであります。然し之は決して家庭だけの問題でも、五作さんの問題でもなく、私共の日々夜々に突き当たり、背負うてゐる生々しい問題であります。

私共は、喧嘩もせず、盗みもせず、別段悪い事はしてゐない積りで居りますが、心のうちを考へて見ますと、何事につけ、誰れに対しても、常に『われは善い、人は悪い、われは正しい、世間は間違つてゐる』と思ひつめて、そのために昼夜不断に罪を造つてゐるのであります。

その有様といふものは、表は平静に見えましても、憤火の口の上に蓋をしてゐるやうなものであります。心の内側では不平や不満が渦を巻き、詈りと嘲の心が何時も煮え立つてゐるのであります。

罪！。私は幸に刑務所へ行くほどの罪は犯して居りませぬけれども、『自分はよい、人は悪い』と睨みつづけてゐるこの心！。睨むといふほどではないにしても、自分のすること、思ふことは、全部が全部正しいと思ひ、人のすること、言ふ事は一々批判を加へてさげすみの眼で見えてゐるこの心！。損をしてはならぬ、敗けてはならぬと争ひ続けるこの心！。然もそれは物質上の事だけでありません。体面とか、意地とか、感情とか、あらゆる事に、愚にもつか

く事があつても、すぐその下から『自分はこの様に我身の浅間しさを反省する事の出来る善人であるけれども、世間の人にはちつとも反省せぬ悪人ばかりである。さういふ者と拘り合つて行かねばならぬこの世の中といふものは、眞面目な者は損ばかりする』といふ様な思ひさへ湧いて出る。そして、何処までも入様を悪人にし、自分が善人にならねば承知の出来ない私であります。

省みれば、開法四十年、幸に五十七才の寿命を恵まれて今日に及びましたけれど、来る日も、只この浅間しい根性を繰返すのみの私、口では『わたしの様なものを』と言つて、外形は耐へ忍んで柔和忍辱の相を示し得ても、『わしのやうな善人はやがて花も咲いて、いつかは認められる時もある』といふ予想をすることが出来ず、時に堪へ忍ぶにしましたも、それはその予想を踏台にしてゐるので、どうしても悪人にはようならない私であります。

今幸に如来のまことに照らされて『さういふ我慢の私』と分らして貰つても、その我身の問題よりも地上の栄華が重大であり、如来のまことよりも、今日の感情の勝利が大車であつて、勝たねば損と思ひ、負けてはならないと思ひ、何処までも善悪、損得に拘りはてて行く私、果ては『かう云ふ奴だから仕方がない』と捨ててかかき、『悪くてもよいのだ』ときめて、然も猶『自分は自分の悪に気がついてゐるだけ、人様よりは善人だ』と、どこまでも『善

ぬ微細な問題にもかかりはてて、鞆の目、鷹の目で、勝たう／＼としてゐるのが私であります。

よく／＼考へて見ると、私が勝たうとする事は人様を敗かさうとする事であり、私が善人になる事は、人様を悪人に墮さうとする事でありまして、これが悪でなくて何でありませう。然るにこの罪はすこしも問題にせず、表面の見せかけの所作や行動を以て、立派と思ひ、善と信じてゐる私、いはんや、魚を喰ひ、牛を喰うて生きてゐるのに、その惨酷さも感じ得ないまでにしびれてゐる私であります。斯ういふことを繰り返してゐる限り、私の心に眞実の平安が恵まれやう筈がありません。徒つて世の中が平和にならう筈もありません。

社会の平和を乱してゐるのは人様ではなく、この私であります。世の中を不幸にしているものは、誰でもなくこの私であるのです。それなのに、自分の罪は問題にせず、『人が悪い、世間がきたない』と向ふばかりを批判して、嘆き惑ふのが私であつて、『我』を押し立てて反抗したといふ五作さんの養子の姿は私の今日の姿でありませぬか。ところが實際は何を考へてゐるかといふと『自分は信仰もあり、念仏もしてゐるから、五作さんと同じ立場だ』と思ひ、だから、堪へ難きも堪へ、忍び難きも忍ぶ善人であると思つてゐて、人様より一角立派な者と思つてゐる。時に『わたしの様なものを！』と我身の浅間しさを気付

人』を押し通さうとして罪を重ねて行く私であります。

今ここに五作さんのお話を聞いても、我身の悪に泣きに泣いた五作さんに学ばうとはせずに、五作さんの様な『善人』になりたいと思ふ私であります。

善人になりたいといふ事は、我身の悪を過少評価して、その悪に蓋をしようとする事であり、然もそれによつて己の価値を高めようとする事で、どこまでも、相対の善悪、勝ち負けにかかりはてて、絶対の如来のまことには遠ざかつて行く私であります。

まことに『如来の御恩といふことをば沙汰なくして、我も人もよし悪しとのみ申し合ひ』、無限に我他彼此の争ひのやまぬ、地獄必定の身であります。善導大師の『自身は現に罪悪生死の凡夫、曠却よりこの方、常に沈み、つねに流転して、出離の縁あることなき身』であります。このそらごと、たわごと、まことあることなき身に『ただ念仏のみぞまこと』の光を放つて下さるのであります。

その如来絶対のまことは、まことならぬものに対したまこととなく、まことならぬものを捨てず、やがてはまことに同化して了うて下さるまことであります。今仏縁ありがたく、このまことなる念仏に恵まれて、生死罪障の私に眞実のやすらぎを賜はり、この無明流転の身に不滅の燈炬を頂き、そこに久遠の生命を恵まれるのであります。

編集後記

新年を謹んで賀し奉ります。

本年はさる年として、見ざる、聞かざる、言はざる、の三ざるの絵が随所に見られます。この故事来歴は知りませんが、目と耳と口との三つの門を塞ぐ、それは結局臭いものに蓋をするのでありませう。然し蓋をせずには居られないところに、煩惱の汚濁と悪臭と毒気が無限に渦巻いてゐることが知られます。そこに気付くと最早修養とか道徳とかは無力化して了ひ、絶対の大悲の独壇場となります。

猿は、仏教では「意馬心猿」として煩惱の荒れ狂ふさまにたとへ、或は「一猿六窓」として、煩惱の猿公が眼耳鼻舌身意の六つの窓を走り廻るにたとへられます。そこに孫悟空を思ひ浮べる。仏様の照護のもとに旅する孫悟空が、そのことを窮屈がり、空中を数時間、数日、飛んでもう仏掌から出られたと信じて降りると、仏様の御指の一節にも達してゐなかつた。そこで今更のやうに仏様の掌から出ることの出来ない身を知つた、といふ逸話であります。が、私共の道徳や修養では手に負へない煩惱の猿公も、広大無辺の仏心の中には容易におさめられる、その跳梁も手応がしなくなるのであります。猿年の年頭、いよく煩惱の狂ほし

さを教へられ、念仏の益々浮び出るところとであります。

△福島先生の「三つの往生」は、私共の姿を写す妙鏡であり、深く省みさせて戴きました。二年余のベルリン遊学を終へて十二月廿四日帰国せられました山田幸さんの努力で、福島先生の「自由思想と信仰」が独文に訳されてベルリンで出版せられることになりました。このことは欧州各国が「自由と信仰」といふことを大切に考へて居る証拠にもなり、そこに念仏のひかりが先生を通じてさしやうことで、有難いことであります。(調布市仙川町七九四。)

△三瓶師の御不自由な御身で、いやむしろその故にこそ、いよく精誑され、身誑された信味、近角先生の思召しを、要をつくし極めて草して下さいました。「信仰に、旧信仰も、新信仰もない」と教へられました近角先生の至言は、兎角時代適否のみに終り勝たぬ非を知らされます。又時代を越える如く、山を出て山の全貌が知れる如く、真の時代の動きを知られる、そして最も時代に即した活動の建現されることもいよいよ明らかになりました。(島根県大家局区井田) △「五作さん」の松村繁雄氏の原稿は妙好人を仰ぐ上に大切な心構へを教へられます。とかく立派な話、美事な話

をきくと、出来もしないくせに自分も同じ善人になりすまし勝な心を深く誠められます。山口県仁保局区内、仁保△「ただ念仏」の原稿は、五十二歳になりました私の、二十五年前に承つた六十歳の御時の池山先生の御信味に、深く心うたれるままに、年頭の辞にかへました。

御案内

一月の第二、三、四日曜、午後一時半、一道会館、法話会。
但し毎月は、第一、二、三日曜、毎月十三日、熱田区幡野町願入寺、午前午後、法話会。
毎月廿四日、昭和区小椋町教西寺、午前午後、法話会。

定価	一部	十七円(送共)
	半年	百円(送共)
	一年	二百円(送共)
編集・発行人	花田 正夫	
印刷人	奥川 正生	
名古屋市千種区千種町馬走二八		
名古屋市南区匠上町二ノ二八		
発行所	慈光社	
振替口座名古屋一〇四七〇番		